

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

趣旨説明

山本博之

マレーシア 13 州のうちボルネオ島北部に位置するサラワク州とサバ州は、首都クアラルンプールを含む半島部マレーシアと南シナ海によって隔てられていること、半島部マレーシアで植民地行政を通じて形成されたマレー人、華人、インド人という民族分類とほぼ無縁の人々が多く暮らしていること、世襲のマレー人スルタンを元首に戴く諸邦の連合体が独立した半島部マレーシアとは異なってマレー人スルタンと切り離された植民地空間として形成され独立したという植民地化と脱植民地化の過程を経ていること、そしてマレーシア結成の過程で連邦憲法によってサラワク州とサバ州に高度な自治が認められていることといった地理的・社会的な要因や歴史的・政治的な経緯などのため、マレーシア国土の約 6 割の広さを占めるにもかかわらず、制度の上でも意識の上でもマレーシアの一部としての扱いを十分に受けてこなかった。このことはマレーシアを対象とする研究にも反映されており、1963 年のマレーシア結成から半世紀を経てもなおマレーシア研究の多くが「サラワクとサバを除外する」と断り書きする状況が続いてきたことにもよく表われている。

この間に、サラワクとサバは、マレーシア研究という一国研究から半ばはみ出した形で、それぞれ独自の地域として研究が進められてきた。特にサラワクについては、生態環境、社会文化、政治経済を含む幅広い分野で多くの研究が進められており、国際的にも研究者の層は厚く、日本人研究者もその例外ではない。ただし、このような特徴を持つサラワク研究が、その良し悪しとは別に、マレーシアの他地域を対象とするマレーシア研究と十分に接合されない形で発展してきたことも否めない。

2000 年代に入り、主に半島部マレーシアの政治状況に規定されて、マレーシアにおけるサラワクとサバの重要性が高まりつつある。いまや、政治経済のみならず、生態環境や社会文化を含めて、サラワクとサバを除外してマレーシア全体について語ることは難しくなっている。このことは、サラワク研究をマレーシアという枠組みに位置付けることの重要性も増していることを意味している。むしろ、これまでのサラワク研究はイシューごとに適切な枠組みに位置付けられて行われてきたのであり、サラワク研究がサラワク研究として閉じていたということではなく、それを位置付ける枠組みの 1 つとしてこれまであまり目が向けられてこなかったマレーシアという枠組みの重要性が相対的に高まっているということである。

本特集は、これまでサラワク研究がどのような課題に取り組み、何をどこまで明らかにしてきたのかを確認した上で、より大きな枠組みに位置付けることでサラワク研究の新たな展開の可能性を探るため、より大きな枠組みの 1 つとしてマレーシアに焦点を当てるものである。はじめに本特集の序論に相当する祖田亮次論文により、マレーシアにおけるサラワクの位置づけと、これまでのサラワク研究の展開およびそのマレーシア研究における位置づけについて包括的な見取り図を示した上で、現在サラワク研究の最先端でどのような研究課題が取り組まれているのかを、民族分類（佐久間香子論文）、政治エリート（森下明子論文）、生物多様性と生態系サービス（竹内やよい論文）、インドネシア人移住者（加藤裕美論文）、熱帯雨林伐採と先住民の抵抗運動（金沢謙太郎論文）の 5 つのテーマに即して論じる。

それに続く論考は、サラワクをマレーシアあるいはそれと部分的に重なる別の広がりにおいて捉えている。鈴木絢女論文はマレーシア政治、及川茜論文は華語文学の立場からサラワク（研究）にアプローチする。また、本特集は 2016 年 11 月 27 日に行われた日本マレーシア学会の 2016 年度研究大会シンポジウム「サラワクから見るマレーシア」での発表と議論を発展させたものであり、シンポジウムでコメンテーターをつとめた 2 人の寄稿（石川登原稿と篠崎香織原稿）は、シンポジウムの内容を踏まえて本特集の議論をさらに広げる試みである。

この特集が、サラワク研究とそれ以外のマレーシア研究の結びつきを一層強め、サラワク研究に新しい文脈を加えるとともに、サラワク研究と接合することでマレーシア研究をさらに発展させ、マレーシア研究を真にその名にふさわしいものへと更新する一歩となることを期待する。

(やまもと・ひろゆき 京都大学)